



TITLE:

HRAF室(Human Relations Area Files)の開室準備進む

AUTHOR(S):

CITATION:

HRAF室(Human Relations Area Files)の開室準備進む. 静脩 1965, 1(4): 2-3

ISSUE DATE:

1965-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36244>

RIGHT:

HRAF室 (Human Relations Area Files) の開室準備進む

東南アジア研究センターの努力によって、京都大学は1962年5月10日をもって Human Relations Area Files (HRAF と略称) のメンバーとして正式に選ばれた。その結果ばう大な資料が、アメリカのユール大学におかれている HRAF 本部から送付されてきた。資料は一応本館に集積され、1964年2月 HRAF 本部より派遣されたマーフィ 女史から資料の整理法について指導を受け、同年4月より、本館の講演室を HRAF 室として転用し、本格的に資料の整理を始めた。



HRAF は「人間の文化や社会を研究するあらゆる科学にたいし、資料蒐集と研究成果公開の便宜を図ること」を目的にうたっているが、その事業は、もっぱら比較文化論の観点から、地球上のあらゆる社会を対象になされた実証的研究の業績をひろく集め、それを独自のやり方で体系的に整理し、研究者の参考に供することである。

資料は、単行本であると、雑誌論文であるとを問わず、各国の学者のすぐれた研究業績を、各頁ごとに写真にとって、20.5×12.5cm のスリップに印刷したものである。現在本館 HRAF 室には約 220 万枚以上のスリップが集積されているが、これらはまず大きく、Asia, Africa, Europe, Middle East, North America, South America, Russia, Oceania に地域別され、各地域がさらに民族別に区分されている。

つぎに、個々の民族は 880 余の主題項目に区分される。たとえば 551 という主題項目は Personal Names ということになっている。いまもし、イロコイ族の Personal Names についての資料が欲しければ、North America の NM 9 の Iroquois 族の 551 のところをみれば、欲するデータがたちどころに得られる。同様にアランダ族のそれが欲しければ、Oceania の 018 Aranda 族の 551 のところを見ればいい。しかも、HRAF においては、英語以外で書かれたものはすべて英語に訳されているから、英語さえ読めればデータを利用する上で、言語上の障害はないわけである。

HRAF の整理法は、情報管理の立場からみて、われわれ図書館員にとっては、きわめて興味深い。従来の図書館的な整理法では、整理の単位は、1冊ごとの図書あるいは雑誌であった。その後整理単位は、雑誌の場合、ひとつひとつの論文にまで細密化されてきたが、HRAF の場合、整理単位はひとつひとつの情報そのものである。すなわち、オリジナルの本文は、まず1頁ごとのスリップに分解される。この1枚のスリップにはいくつかの情報が含まれているが、その情報単位ごとに、さきに述べた 880 余の主題項目の番号が与えられる。いま、1枚のスリップに3つの情報が含まれているとすれば、ひとつひとつの情報に、主題項目の番号が与えられる。そして同一のスリップが3か所のそれぞれの番号のところにファイルされているのである。利用者は図書館のカードを検索するのと同じに、求める民族名の、欲する番号のところを見さえすればよい。図書館のカード目録が単に情報のロケーションを案内するだけであつたのに対して、HRAF では、カード目録の検索と同様な手順で、情報そのものにただちに到達しうるのである。したがって、HRAF

は資料整理のいわば理想的な形態を示すものと言えよう。

HRAF は 1949 年にユール大学に創設されたが、その創設前に 20 年ほどの前史を有している。したがって今日までにすでに 35 年余の歴史を持つが、その間ファイルは絶え間なく成長を続けてきている。たとえば 1962 年から 64 年にかけて、スリップの数は 165 万枚から 220 万枚までに成長している。今後ともますますファイルは大きく成長していくであろう。

HRAF のファイル・コピーには、Original copies と Micro copies の二種がある。Original copies は正式のメンバーにのみ配布される。京都大学はアジア地域における唯一の正式メンバーであるから、Original copies のあるのはアジア地域では本館のみである。Micro copies は国内でも 2 か所に備えられているが、ファイル自体がさきに述べたように成長していくものであるから、その点 Micro copies では、ファイルの成長に追いつけない。

HRAF のような貴重な資料集成が本館に設置され、図書館活動の一環として運営されることになったのはこの上ない喜びである。いま開室を前に資料整理の最後の迫込みに入っているが、HRAF 室が正式に開室されたとき、研究者に与える利便は実に大きいものである。

図 書 館 と の 4 年 間

I

H・A 生

図書館は、僕にとってある意味では空気のような存在であった。日頃は惰性的に利用するのみでそれ程その存在の貴重さを自覚していた訳ではないが、いざ卒業ということになって開き直って考えてみると、教室の延長として、また書斎の代替物として、あるいはまた観念的、クラブ活動の場として、なんと色々な必要不可欠の物質的手段をわれわれに提供してくれてきたかという事に思い至り、いまさらながら湧き出づる感謝の念を禁じえない次第である。

しかしここでは、かような感謝のために 4 年間の回顧を無批判に展開することをやめ、改善が比較的容易だと見られる現実の図書館についての不平不満をちょっぴり披瀝してみたい。図書館の近代化のためのなにかの参考となれば幸である。

1. 学習は閉鎖的であつ静かな環境でやれとはよくいわれる言葉である。だが閲覧室の現状はどうだろう。長い中央の通路を闊歩する足音、うち興ずる談笑、イスのきしむ音、見え隠れする人の姿、その他様々な聴覚的視覚的刺激の氾濫が、さ程神経過敏でない人々をも苦しめ、知らず知らずのうちに勉強の能率を低下させているのではなかろうか。これら館内の開放性に起因する障害は、例えば閲覧室を三つぐらいに区切って機能分化し、ひとつの部屋は娯楽本位に図書館を利用する人のための雑誌室（談話や喫煙を許し、廊下のソファはここに移す）。他は文科系学習室、理科系学習室と配分するという風に工夫することにより、大いに緩和されうと思われる。グループ学習者専用の部屋も作るに越したことはない。こうすれば、夏の通風の問題は残るが、静寂のしじまに包まれて空想の世界を天翔るための条件がずっとよくなると思